

A Study of Rosemary's Baby : Gender, Race and  
Holocaust in Roman Polanski's Works

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 智則 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1334">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1334</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 『ローズマリーの赤ちゃん』論

— ロマン・ポランスキーにおけるジェンダー・人種・ホロコースト —

## A Study of *Rosemary's Baby*

Gender, Race and Holocaust in Roman Polanski's Works

西山智則

NISHIYAMA, Tomonori

### 1. 脅威の赤ちゃんたち——タランティーノとポランスキー

2019年に公開された『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』は、鬼オクエンティン・タランティーノ監督が映画史の衝撃事件に挑んだだけあって、映画界の話題をさらった。セルジオ・レオーネ監督の1968年の傑作『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト（公開時邦題ウエスタン）』から、そのタイトルを拝借した作品である（これこそ本物の西部劇だと宣言するごとく、邦題にずばり『ウエスタン』を掲げた、マカロニ・ウエスタンという「偽物」が「本物」を超えた作品が『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト』だった）。『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』は、1969年にロマン・ポランスキー監督の妊娠していた妻で女優のシャロン・テート<sup>ヘルタースケルター</sup>たち五人が、黒人との「最終戦争」が近づいていることを説き、悪魔のようなチャールズ・マンソンのマンソン・ファミリーによって刺殺された事件を、ちょうど半世紀後の2019年に映画

化したものである。皮肉にもポランスキーは、ビクトリア朝の建物ブラムフォードに越してきて、悪魔を崇拝する住民たちに見込まれ、悪魔の子供を出産してしまうローズマリーを描く『ローズマリーの赤ちゃん』（1968年）によって名声の頂点にいた頃であった。

あたかも『ローズマリーの赤ちゃん』の「悪夢」が「現実化」したようなシャロン・テート惨殺事件は、人々の関心をひき、これまでトム・グリース監督の『ヘルタースケルター』（1976年）やデヴィッド・ジェイコブソン監督の『チャールズ・マンソン』（2002年）など、ドキュメンタリーかと錯覚させる「本物」ほい映像で、数多く映画化されてきた。そうした映画化作品のなかで、タランティーノの『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』は異色作である。スプラッター映画好きのタランティーノらしく、映画史の凄惨な「悪夢」の血まみれの「再現」がなされる。ところが、血飛沫をあげて殺害されるのはシャロン・テートたちではない。マンソン・ファミリーである。彼らはTV西部劇スターのリック・ダルトン（レオナルド・ディカプリオ）

キーワード：『ローズマリーの赤ちゃん』、ロマン・ポランスキー、『テナント/恐怖を借りた男』、『反撥』、クエンティン・タランティーノ

Key words : Rosemary's Baby, roman polanski, The Tenant, Repulsion, quentin jerome tarantino

とそのスタントマンのクリフ・ブース(ブラッド・ピット)の家に間違えて侵入していたのだった。家に侵入した者たちが逆に「抹殺」されたのである。タランティーノはハリウッドの歴史を改変したのだ。

1968年はヘイズ・コードというアメリカ映画業界の自主規制が廃止され、残酷描写や性描写が過激になってゆく年である。ジョージ・A・ロメロの傑作ゾンビ映画『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』が公開され、人間を食べる現代的「ゾンビ映画の誕生」を迎え、また、アイラ・レヴィンの1967年の小説『ローズマリーの赤ちゃん』がポランスキーによって映画化され「オカルト映画の誕生」を映画史に刻んだ時でもあった。『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』ではリアリティを醸しだすために、ニュース映像的な演出が随所に差し込まれているが、1968年に写真家エディ・アダムズが撮影した南ベトナムの警察庁長官の拳銃によってベトコンが頭を撃ち抜かれた殺害映像に代表されるように、ベトナムの「隠された真実」が暴かれだした時期でもある。また、1963年にはケネディ大統領が頭部を撃ち抜かれ、妻ジャクリーン・ケネディが飛び散った脳を、あたかも肉片を集めるゾンビのように、必死で集めているシーンが撮影されている。この映像は衝撃的だった。『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』ではゾンビを殺すには頭脳を破壊するという法則が確立されたが、町山智浩は「ロメロが『頭を撃つ』と考えたのも、その時代に頭を撃つイメージが蔓延していた」からだとする(町山『町山智浩のシネマトーク』35)。ベトナム戦争の泥沼化に伴い正義が揺らいだ時代、陰に潜む悪魔の力や陰謀を訴えるオカルト映画が流行しだし、「あなたの知らない世界」を描くこと

がブームとなってゆく。

ローズマリーは赤ん坊の宿る腹部を触り、「生きている (It's alive)」という言葉を口にすると。これは、ジェームズ・ホエール監督の『フランケンシュタイン』(1931年)において、怪物が生き返った瞬間に博士が漏らした「生きている (It's alive)」を踏まえた台詞である(フランケンシュタインは女性の「子宮」を使わずに怪物を「誕生」させたが、ゲイのジェームズ・ホエールは「フィルムの縫合」で映画史に残る「皮膚の縫合」の怪物のイメージを「誕生」させたのである)<sup>1)</sup>。『ローズマリーの赤ちゃん』からオカルト映画がブームとなり、ウィリアム・フリードキン監督の『エクソシスト』(1973年)やリチャード・ドナー監督の『オーメン』(1976年)など、悪魔の子供たちが銀幕に次々に「誕生」する。『エクソシスト』では、ペニスをつけたマリア像も登場するが、悪魔に憑依され「男の声」で猥雑な言葉をわめき、十字架でマスターベーションをする少女リーガンは、セクシュアリティを逸脱し、「反逆」する思春期の少女の表象である。

ロメロは『ジョージ・A・ロメロ／悪魔の儀式』(1972年)においても、平凡な日常を送る人妻が不思議な能力を身につけ、魔女へと転落してゆくオカルト世界を描いたが、人を喰う現代的ゾンビを誕生させた『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』では、ゾンビになってしまい父親を食い殺すという親への「反逆」を見せた少女カレンは、あたかも「悪魔の子供」のようだ。この意味では1968年は、ローズマリーの悪魔の赤ちゃん、悪魔のように母親を食い殺すカレンという二人の「悪魔の子供たち」の「誕生」を記す年であった。ちなみに、スタンリー・キューブリック監督

の『2001年宇宙の旅』も1968年の公開であり、年老いてベッドに横たわる船員のポーマンは、モノリスによって光に包まれた胎児「スター・チャイルド」へと進化を遂げていた。この映画は宇宙船を統括するコンピューターHAL 9000が突然乗組員に「反逆」を起こす物語でもあった。『ローズマリーの赤ちゃん』では悪魔の赤ちゃんが生まれた時に悪魔崇拝者たちは「新生の年だ (The Year is One)」と喝采するが、1968年は様々な子供たちが「誕生」した「新生の年」だった。

また、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』のあたかも悪魔の子供のようなカレンのメイクは、ポランスキーの『反撥』(1965年)の影響を受けている(町山『町山智浩のシネマトーク』32)。ロンドンのアパートにおいて姉ヘレンと暮らす思春期の処女キャロル(カトリーヌ・ドヌーブ)は、潔癖性から男性恐怖症になっている。キャロルが歩く歩道には亀裂が走っているし、壁にも亀裂が走るように、精神が崩壊しかかっているのである。やがて、姉と男が旅行に出かけると、アパートに引きこもる。壁から出てきた男の手に掴まれる妄想に駆られるキャロルは、部屋に入ってきた恋人コリンを殺害してしまい、次に関係を迫ってきた大家も殺す。キャロルの部屋に侵入してきたものは皆死を迎えるのである。帰ってきた姉は、あたかも胎児みたいに、ベッドの下に隠れているキャロルを発見する。

身体への侵入に怯えながらも、性に無関心ではいられない思春期の女性の精神が、室内への侵入を使って描かれる。『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』のごとく誰も中に入ってくる来ないようにドアに板を打ちつけ、頻りに鍵穴から外の様子を覗いており、観客はキャロルの視点と同一化される(キャロルが黒い

男にレイプされる幻想シーンがあり、これはローズマリーが黒い悪魔に犯されるシーンを連想させる)。また部屋には、その心理状態を警告するかのよう、踏切、電話のベル(キャロルは電話線を切断する)、時計のアラームなどの雑音が鳴り響き、姉の喘ぎ声も聞こえてくる。『反撥』には眼を使い視線恐怖を表すポスターがあり、キャロルは前髪を伸ばして眼を隠しているが、彼女の殺人が発見された最後に、キャロルは現場の人間たちから凝視されることになる。こうした大人の世界に「反撥」する不気味な少女のイメージは、『エクソシスト』を經由して、1970年代の親に「反撥」する少女たちの姿の原型となった。たとえば、斎藤光正監督の『積み木くずし』(1983年)において、悪魔のような不良少女へと「転落」してゆく中学生の少女は、『エクソシスト』の悪魔に憑依された日本版リーガンと言ってよいだろう。

また、キャロルの侵入への恐怖は、ゾンビ映画のように壁から手が出てきて彼女をつかむシーンにも象徴され、ロメロのゾンビ映画に継承されていった可能性を町山智浩は示唆している(町山『町山智浩のシネマトーク』32)。アメリカ映画はエイリアンやゾンビや殺人鬼たちが侵入してくる映画を撮り続けるが、先住民の土地を侵略して、彼らを虐殺し成立した国家がアメリカだった。この国は罪の意識ゆえに今度は自分たちが侵入されることを恐れている。たとえば、最初期のアメリカ長編映画でD・W・グリフィス監督の『国民の創生 (The Birth of a Nation)』(1915年)において、南北戦争後、白人たちが籠城する家を黒人たちが包囲し窓から手を入れてきて、白装束に着替えたKKKがその窮地を救出する。このクライマックスはゾンビ映画、スー

パーヒーロー映画の原型の「誕生」である。

KKKをスーパーヒーローとして描いた『国民の創生』の「陰画<sup>ネガ</sup>」として製作されたのが、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』だった。白人たちが奴隷に包囲される『国民の創生』をひっくり返したかのように、黒人の主人公ベンを包囲するゾンビは全員白人なのである（西山『ゾンビの帝国』144-151）。ロメロの『死霊のえじき』（1985年）のように、壁から突き出してくる手は「侵入の表象」としてゾンビ映画のトレードマークにもなった。ポランスキー監督には、閉じられた空間を舞台に人間の恐怖を描いたアパート三部作『反撥』『ローズマリーの赤ちゃん』『テナント／恐怖を借りた男』（1976年）があり、建物の内部が心理の投影物として描かれる。本論では、この三部作の中で『ローズマリーの赤ちゃん』を中心に分析し、ホロコーストの体験者であるポランスキーが、いかに人種やジェンダーにおける弱者が迫害されてきたという視点から映画を制作しているかを考察する。

## 2. 『ローズマリーの赤ちゃん』におけるジェンダーと迫害のテーマ

『ローズマリーの赤ちゃん』では、役者の夫ガイとローズマリー・ウッドハウス（ミア・ファロー）は、ニューヨークのブルームフォードの古びたアパートに引っ越してくる。前にそこに住んでいた女性弁護士のガーデニア夫人が亡くなった部屋を借りたのである。ガイは隣人のローマンとミニーのキャスタベツト夫妻と親密になり、彼らは時に過度に詮索や干渉をしてきたりする。キャスタベツト夫妻の養子の女性が飛び降り自殺をしたことから、不安を感じるローズマリーは、ある夜眠りに落ち、周囲に隣人たちがおり悪魔に犯される

という幻覚とも現実とも判断できない体験をして妊娠する。隣人たちはローズマリーに親切にして、高名なドクター・サパースタインも紹介するが、どうも信頼ならない。キャスタベツト夫妻、産婦人科医、夫でさえも悪魔崇拝者だったのである。唯一の味方である作家エドワード・ハッチも死亡する。妊娠の不安が生んだ幻想かと思われた悪魔崇拝者の陰謀が現実であり、悪魔の嫡子である異形の赤ん坊をローズマリーは生んでしまう。

『ローズマリーの赤ちゃん』では、姪も含めて子供を何人も食べたトレンチ姉妹がブルームフォードに住んでいたことを作家ハッチは語り、「カニバリズム」を揶揄しているし、彼らがオープンで焼いたラムを食べるというシーンが続く。また、原作小説では「ドクター・サパースタインに、生同様の肉を食べる話をしてからいくらか経たないころ、ローズマリーは生血の滴る鶏の心臓をむしゃむしゃやっている自分に気づいた」ともいう（152）。映画でもローズマリーが食べるステーキや鶏肉など、食べ物の映像に満ち溢れているが、それにもかかわらずローズマリーは衰弱してやつれてゆくように、ポランスキーが描く食べ物は嫌悪感を掻き立てるものばかりである。ポランスキーの映画の中でも最も強烈なイメージを放つのが、『反撥』の料理されたウサギだろう。キャロルは胎児を思わせる料理用のウサギの頭をバッグに入れて、残りは室内に放置し腐乱してゆく。それは胎児の象徴でもあり、発芽したまま干からびてゆくジャガイモ同様に、性に対する「好奇心」と「嫌悪（Repulsion）」の相克によって、次第に消耗してゆくキャロル自身の姿でもある<sup>2)</sup>。

キャロルと同様に、ローズマリーは性に対して嫌悪感と渴望の両方があった。妊娠した

後、彼女は髪をボーイッシュなショートにするが、それは体が膨れてゆく妊娠時の女性的身体を拒否しているからである（『反撥』のキャロルも性に対する嫌悪感から、子供に退行してゆくようであった）。意識の混濁状態にあるローズマリーが悪魔にレイプされたことを隠すために、夫ガイは昨夜の相手は自分であって、「ちょっとおもしろかったよ、死体愛好症みたいな感じで」と言う（97）。動けない女性を描くのがポランスキーの好みなのだろうか。キャロルの目のアップで始まり終わる『反撥』は、冒頭では片眼だけを見せて全身を白い布を巻いた女性が横たわっていた。あたかもエジプトのミイラのような姿だが、それはバックのエステをしている最中だった。このシーンは後の『テナント／恐怖を借りた男』において、飛び降り自殺を図ったシモースが病院で包帯に巻かれる姿によって反復されるのである（シモースがミイラのように包帯を自ら取り払う幻想も描かれている）。

やがて、ローズマリーは悪魔崇拝者たちが自分の赤ん坊を生贄にするのではないかと疑い始める。不安により幻想を見てしまうという信頼できない語り手は、女性家庭教師が幽霊を見るというヘンリー・ジェームズの『ねじの回転』（1898年）あたりからすでに洗練されていた。女性家庭教師は庭師と前任の家庭教師の幽霊たちを目撃する。しかし、牧師の娘であった彼女は、雇用主に向けた恋心とそれを禁じる抑圧の結果、性的妄想を見てしまったのかもしれないというひと「回転」がこの小説には仕掛けてある。女性家庭教師は拷問用の「ねじ」が「回転」し締めあげられたように苦悶する。映画版『ローズマリーの赤ちゃん』では、しばしばヒステリーによる錯乱などと言われ、ローズマリーの正気が疑

われ、悪魔崇拝者たちのことが露わになる結末まで、観客に何が真実かわからない曖昧な世界を見せるようにしている。これに対して原作はこの物語の現実性を強調する。原作を書いたレヴィンは「私はスリラーを書いていたのである。そうだと絶対に信じていた。後にもらった精神科医たちからの手紙には、あれは明らかに幻想だったのではと書いてあったが、私は違うと言った。精神科医たちは出産後の鬱だったのではとも言うが、私は違う、あれは現実だったのだと言った」と述べているのである（Newton 67）。『反撥』のキャロルは侵入恐怖の幻覚から破滅したが、ローズマリーの恐怖は現実だったのだ。

新居では黄色い模様の壁紙が貼られてゆく。町山智浩が言うように、これは米国女流作家シャーロット・パーキンス・ギルマンが家父長制社会の圧力を描いた「黄色い壁紙」（1892年）を彷彿させはしないのか（町山『映画その他ムダ話』）。ヒステリーにより黄色い壁紙の部屋で安静療法を強いられた妻が、黄色い壁紙の背後に謎の女を見たと思ひ込むというゴシック小説である。「黄色い壁紙」の語り手である妻が監禁されたような状況は、ローズマリーの姿と重なってくる。ローズマリーは黄色い服を着るし、黄色い壁紙を貼る<sup>3)</sup>。映画では黄色い壁紙から物音が聞こえ、影がうごめく。幸せの黄色ではなく病気の黄色。地下の洗濯場で洗濯する場面では、ローズマリーが金網を背景に映しだされ、金網の奥にいる転落死するキャストベット夫妻の養女は牢獄にいるようだ。原作には「洗濯室は監獄にあつたら相応しかろうと思う代物だった。汗をかいた煉瓦の壁、金網をかぶったもつと多くの電球、そして金網で仕切った部屋ごとにずらりと並んだ深い二連の流し...南京錠の

かかっている小部屋には、たいてい個人所有の機械があった」とある（30）。

ローズマリーが住む歴史のあるアパートは、塔が天に向かって屹立する古城や監獄を連想させるように撮影されており、ゴシック的な舞台装置は整っている。『ローズマリーの赤ちゃん』は、歴史や伝統がないために、城もないアメリカのアパートで展開する「アーバンホラー」である<sup>4)</sup>。商業作品としてのデビュー作『水の中のナイフ』（1962年）において、海上のヨットという限られた空間を使い、夫婦とそのヨットに乗り込んだ若者の三角関係の密室劇を描いたように、ポランスキーは閉所が生み出すサスペンスをうまく活用する。映画全編に女性の監禁を意味する演出がなされており（Wexman 65）、たとえば、出産後に寝ているローズマリーの枕や衣服の縞模様は、牢獄の鉄格子を暗示している。まさしくローズマリーは、ニューヨークにおいて「古城に幽閉された乙女」の役柄を果し、物語は現代に舞台を移したゴシック小説の末裔なのである。

「黄色い壁紙」の語り手はエネルギーを浪費しないよう安静療法を強いられるが、妊娠後ローズマリーも隣人たちに紹介されたドクター・サパースタインに「本など読まないでくださいよ」と忠告されている。「妊娠は一つ一つ違うのですからね、三カ月目の第三週はこんな感じがあるなんて書いた本は、心配の種をつくるだけです」（121）。これは後に友人のキャスタベット夫妻の正体を暴く本をハッチに渡されるシーンの布石だが、ローズマリーは『ローマ帝国衰亡史』という歴史の大著を読み、『キンゼイ報告書』（1948, 53年）を所持している。『キンゼイ報告書』とは性科学者アルフレッド・キンゼイが性について

の膨大なアンケート結果を公表し、アメリカ人の秘めた性生活を暴露した衝撃の報告書であり、保守的な男性からすれば女性にはふさわしくない本だろう（本を読むことを禁じられたローズマリーの唯一の味方は、親代わりだった童話作家のハッチなのである）。

部屋に薔薇をかざり、「子供をつくろう」とガイが言い、その後ローズマリーは薔薇のような赤い服を着て食事をする。玄関にチャイムが鳴り、客人がくるが、ローズマリーは「お願いだから、今は誰も入れないで」と頼んでいる。家屋への侵入を拒むように、ローズマリーは身体への侵入を拒むのだ（また原作で薬物の入ったチョコレートムースを持ってくるミニーに対して、ローズマリーは「彼女、侵入してきて一晩じゅういる気じゃないのかって心配したわ」と言ってもいる（87）。映画でもローズマリーが部屋を探しに来た時、ドアに職人がドリルを入れて穴を開けていたし、薄い壁を通して隣の部屋の物音が聞こえてくる。また、映画でローズマリーは三回注射されるが、そのうちの二回は強制的にされている。悪魔の強姦によるペニスも入れれば三回も強制的に針が「挿入」されたことになる（映画が始まり終わるそばで立つ古風なアパートはどこかペニスの象徴も連想させる）。こうした拒否にもかかわらず、ローズマリーの身体は侵略されるのである。

この映画は「子供を産む機械」にされてきた女性の恐怖をオカルトの形で描いているのである。松葉づえを使う練習をするガイに対して、ローズマリーの背後には片手がない女の像が置かれているが、抵抗の手段のない彼女の状態を示唆しているかもしれない。アイラ・レヴィンの名前を世に知らしめた『死の接吻』（1953年）では、財産目当ての恋人を

妊娠させてしまい、中絶を拒否されたために殺害した事件を契機に謎解きのサスペンスが展開してゆく。セオドア・ドライサーの小説『アメリカの悲劇』(1925年)を思わせるが、赤ん坊を守るために中絶を拒んだ女は殺されてしまうのだ。レヴィンは父権主義の支配をよく取りあげる。『ステップフォードの妻たち』(1972年)ではステップフォードという高級住宅地にジョアンナは夫と共に引っ越してくる。男性協会が力を持ち「これまで二人が会った主婦たちは、女性解放運動を少しも歓迎するようには見えない」保守的女性ばかりだが(36)、ジョアンナは友人の女性も献身的のタイプに変貌していると感じ、この町に潜む陰謀を発見する。彼女たちは理想的な妻につくり変えられたロボットだったのである。

食事の後にローズマリーは意識を失い、悪魔崇拝の集団に見られながら、黒い悪魔に強姦され子供を宿してしまう(最初に悪魔はガイが演じた扮装だが、本物の悪魔と後で入れ替わる。俳優のガイは演じるのが仕事のため信じられない存在で、部屋を借りる時も医者<sup>ドクター</sup>だと答えている)。原作でローズマリーが「どうぞ風疹や、サリドマイドのような副作用のある強い新薬からお守りください」と言うように(118)、当時のサリドマイド薬害事件を考えるのは難しくはない。だが、ローズマリーの恐怖は、これまで女性たちが日常感じてきたものではないのか。映画では年老いた悪魔崇拝の集団が悪魔に犯されるローズマリーを見つめている。過度に干渉するローマンとミニーはガイの両親的存在だった。この光景は、家系のために子供を産めと、祖父母たちから強要される圧力を表している。ローズマリーは父代わりのハッチと、ガイの両親的存在のローマンとミニーの二つの家の間を揺れ動く

のである。

2年おきに子供が3人欲しいと言い、原作では妊娠するために安全日について嘘を言う24歳のローズマリーだが、意識不明の性交後、「ガイ」つまり「男」に対する不信感がつくる。「あんなふうにして交わって欲しくはなかった」とローズマリーは思い始める。「魂も自我も女らしさもなく——彼が愛してくれているはずの自分というものがどこにもない、ただの肉体を犯すようなことは、して欲しくなかったのだ。過ぎ去った数週間、数カ月を振り返ってみると、記憶にこそ残っていないが、見落としてきた証拠が、彼女に対する彼の愛情の欠如を示す証拠が、彼の言葉と感情の間の隔たりを示す証拠が、おどろくほどあることに気がついた」という(99)。16歳も年の離れているローズマリーとガイは、あたかも親子のようにも見える(Newton 48-49)。ならば、ローズマリーは血筋を保つために、ガイ(男)という父親から差しだされる娘という「商品/子宮」だったことにもなる。

ローズマリーは悪魔崇拝の一味に囲まれながら、強姦され、悪魔の赤ちゃんを出産する。ドクター・サパースタインの診察室で、「ローズマリーは脇にあったタイム誌を取った。『神は死んだか?』と、赤い地に疑問形の見出しがついている」と原作にあるように(212)、それは「イエスの誕生」のパロディでもあった(映画でも「神は死んだ」という言葉がたびたび描かれる。ちなみに、ポランスキーはサミュエル・ベケットの不条理演劇『ゴドーを待ちながら』(1952年)を映画化したかったそうだが、ローズマリーのベッドの傍の机には『ベケットのシアター』という本のコピーが置かれている(Newton 100))。ローズマリーはむろん「ローズ」と「マリー(マリア)」

であり、夫のガイとの間にはセックスの痕跡は希薄である。映画版では、二人のベッドシーンがよく描かれるが、性行為が中断するように描かれている。たとえば、最初のセックスシーンではガイは「しいー、トレンチ姉妹が聞いている」と茶化して行為をやめる。ローズマリーはデパートのショーウインドウに「イエスの誕生」のジオラマを見ているが、彼女の出産は処女懐胎だと想定してもよい。

ガイという「男」という男性的な名前にもかかわらず、ガイは役づくりのために松葉づえを使っている。足はファリック・シンボルなのだから、これはガイが「不能」であることを示す記号だろう。だとすれば、夫なしで悪魔の子供を宿したローズマリーは「聖母マリア」ということになり、「神は死んだ」後の「悪魔の誕生」のパロディが展開するのだ。YAMAHAのオートバイのCMも流れ、映画の最後ではブレイク・エドワーズ監督の『ティファニーで朝食を』（1961年）に出てきそうな眼鏡をかけた背広のステレオタイプの日本人がローズマリーを写真に撮影するように、コミカルな雰囲気は漂う。つけ加えるならば、コミカルなTVドラマ『奥さまは魔女』は1964年に始まっている。最後に悪魔崇拝者たちは「ローズマリー万歳」と拍手喝采するのである。滑稽だがどこか恐ろしくはないか。

この時期はウーマンリブ運動による中絶やピルの承認によって、母性から女性を解放しようとする動きが起こっていた渦中だった。友人に他の医者をお勧められ、「わたし、中絶はしないわよ」と反論するローズマリーだが、専業主婦として赤ん坊を望んでいるという保守的な反面、ショートヘアにすることで女性性を否定し『キンゼイ報告書』を読む革新的な女性でもあり、二つに分裂している。そし

て、最後には赤ん坊を殺そうとナイフを握っていたローズマリーは、陶酔してゆりかごを揺らすことで「母性という神話」に囲い込まれてしまった。そう、真の恐怖は、1968年という体制への「反逆」の時代に、ローズマリーが「子供を産む機械」にされ、最後には母性本能に従う「従順」な女性に還元されたことではないのか。エリザベット・バダテンテールの『母性という神話』（1980年）によって、母性本能が構築された存在であることが主張されるのはまだ先のことだった。

### 3. 『ローズマリーの赤ちゃん』における人種と迫害のテーマ

『ローズマリーの赤ちゃん』は、公開の1968年という激動の時代をあまり感じさせない。しかしながら、ポランスキー自身もLSDを数回使ったようだが、チョコレートムースに入っていた薬の影響で、ローズマリーが奇妙な夢を見るシーンは、当時流行したLSDによる幻想と重ねることができる（Newton 60）。ローズマリーはヨットに乗り込む幻想を見る。幻想の中でベッドに横たわる彼女の意識は、嵐の中を漂うヨットのように「漂流」する。このLSD的幻想シーンを考えてみれば、『ローズマリーの赤ちゃん』は、同じくトリップシーンもあり、主人公たちがアメリカを「漂流」するデニス・ホッパー監督の『イージー・ライダー』（1969年）や、二人の男がニューヨークを彷徨うジョン・シュレシンジャー監督の『真夜中のカーボーイ』（1969年）のアメリカン・ニューシネマに近い。また、同じ1968年、スタンリー・キューブリック監督の『2001年宇宙の旅』の幻想的なシーンもLSD的イメージと無縁ではないだろう。観客たちは難解な宇宙への「旅」の映画において、精神の内部

への「トリップ」を体験することになったのである。

悪魔に犯されるときに、ローズマリーが見るこのLSDを思わせる幻想シーンにおいて、ローズマリーは乗り込むケネディのヨットには、黒人の水夫がでてくる。「ローズマリーは彼のところへ行き、彼がすべての白人を憎み、彼女を憎んでいることをすぐさま見て取った」と原作には記されている(93)。『ローズマリー赤ちゃん』が公開された1968年は、1965年のワッツ暴動や1967年のデトロイト暴動と、人種暴動が吹き荒れた時代でもあり、原作や映画版にはその緊迫がさりげなく描き込まれている。ポランスキーの映画では、最初に部屋を見に来たローズマリーと夫がエレベーターでいちゃつく時に、黒人がちらりと覗き見る視線が描かれるし、新しい医者診察を受けるときにタクシーの黒人運転手には自分が医者の建物に入るまで見てほしいと依頼するように、ローズマリーは常に見られる存在である。また、原作において、アパートの地下の洗濯場では、「平日のもっと早い時間には、ニグロの洗濯女の団がアイロン掛けをしながら油を売っていて、彼女を見ると見ず知らずの闖入者とばかりに、ぴたりと黙りこくってしまうのだ」(30)。

1968年は黒人と白人の対立が激化した年であった。これから論じるように、『ローズマリーの赤ちゃん』は高層アパートという建物内部でマイノリティの立場にあるローズマリーが悪魔崇拝の集団に囲まれてしまう物語だったが、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』において、白人のゾンビに包囲された農家で最後に生き残った黒人の主人公ベンは、自警団にゾンビと間違われて頭部を射殺されてしまう。それは「誤射」というより、むし

ろ白人を射殺した怪物的な黒人の「暗殺」だったのではないだろうか。ロメロたちはこのフィルムを売り込みに行ったときに、キング牧師が暗殺されたことをニュースで知った。ちなみに、フランクリン・J・シャフナー監督の『猿の惑星』において、核戦争後、人類に「反逆」して地球を支配している猿の文明を通して、ブラックパワーの台頭の脅威が描かれたのも、同じ1968年のことであった。

また、これとは逆にアグニエシュカ・ホランド監督のパリに舞台を移し制作したTVリメイク『ローズマリーの赤ちゃん——パリの悪夢』(2014年)では、黒人のゾーイ・サルダナがローズマリーを演じ、「巴里のアメリカ人」としての黒人の不安が描かれている。すでに述べたように、ポランスキー版の中西部出身でカトリック教のローズマリーはニューヨークでは「異邦人」であり、彼女の身体は悪魔の子供を身ごもらせるための「商品」にされていた。それは、ジョーダン・ピール監督の『ゲット・アウト』(2017年)の黒人の主人公クリス・ワシントンに近づいてくる(Lowentain)。白人の恋人ローズの実家を訪問したクリスは、催眠療法をかけられ、その身体を白人たちが奪い、入れ替わるために売られるというオークションにかけられる。ローズの家に集まっている人間は、黒人の身体を略奪した白人たちだった。それは、黒人の身体を「商品」として販売する黒人奴隷制度の悪夢である。ゾーイ・サルダナが演じるローズマリーは、資産としての子供を産むという奴隷制の悪夢を鮮烈に再現するのだ(TV版ではポランスキー版の姿の見えなかった赤ん坊の全貌が見え、青い眼が強調されている)<sup>5)</sup>。

さらに人種の問題にそって考察を進めると、

アイラ・レヴィンの原作では、妊娠してやつれてゆくローズマリーは、ハッチに「まるで吸血鬼に血を吸い取られているみたいだよ」と言われていることに注目したい（129）。前年に撮影された『ロマン・ポランスキーの吸血鬼』（1967年）の結末では、アブロンシウス教授がそりを走らせるが、ポランスキー演じる弟子アルフレッドは吸血鬼のサラに噛まれ感染し、映画には「彼のために世界に悪が蔓延する」とナレーションが入る。アブロンシウス教授と弟子アルフレッドはドイツ人だが、サラはユダヤ人であり、サラの苗字のシャガールは、ナチの迫害を受けた画家マルク・シャガールから取られており、ユダヤ人の吸血鬼がドイツに対する復讐として世界に広がるブラックユーモアの終わり方となっている（Wexman 63）。ポランスキーは、父親と共に幼少時にゲットーに収容され、そこから逃げ出し孤児のような生活を送るものの、妊娠していた母親はアウシュヴィッツで殺害されるというホロコーストの体験者である。

ローズマリーは友人のジョウンに「あなた1966年度のミス強制収容所みたいな顔してよ」ともたえられていることは重要である（162）。また、髪の毛を短く切ったローズマリーを、アウシュビッツにおいて髪の毛を売るために切られたユダヤ人女性のようにと町山智浩は指摘する（町山『映画その他ムダ話』）。ローズマリーが強制収容に監禁されたユダヤ人女性の表象だとすれば、ホロコーストを知っているポランスキーこそ、この映画の監督に最もふさわしい。また、アイラ・レヴィンの小説『ブラジルから来た少年』（1976年）は、保存されたヒトラーの血液からヒトラーのクローンをつくりだりだし、そのうちの誰かはヒトラーに近い存在になるだろ

うと考えたメンゲレ博士によるヒトラー復活の計画にまつわる物語だったが、ユダヤ人にとって悪魔のような独裁者が誕生するという意味では、『ローズマリーの赤ちゃん』とも似ていなくもない。

ローズマリーは住民たちから監視されている陰謀を感じているが、彼女が幻想の中で乗り込むヨットがケネディ家の物であり、ケネディ大統領や妻のジャクリーン・ケネディが出てくることは見逃せない。原作では、キャスタベット夫妻とローズマリーが初めて食事した時、「ケネディ暗殺事件に話題が移った」。「奥さんは、何かの陰謀ではなかったかというふうに考えていますか？」と質問されている（66）。その後、ミニーについて「彼女、薬草と香辛料を栽培しているわ。すっかり育ったら窓から投げ捨てるんだって」とローズマリーがふざけると、ガイが「しっ。壁に耳あり」と言う（67）。ローズマリーの部屋では相手の声が聞こえているが、それはこちらの声も聞かれていることであり、これは監視という陰謀を連想させはしないのか（1972年には民主党本部に共和党に雇われた五人の人物が盗聴を企み、それを隠蔽工作したことでニクソン大統領が辞任したウォーターゲート事件を迎える）。1963年のケネディ大統領の暗殺事件については、犯行は元海兵隊員のリー・ハーヴェイ・オズワルドの単独ではなく、組織的な暗殺であり、CIA、マフィア、当時の副大統領リンドン・B・ジョンソンらを犯人だとする様々な陰謀論が提唱された。

また、五十年代の頃から隣人による陰謀論としては、アメリカに入り込んで共産主義の思想に国民を染める共産主義の脅威が煽られ、現代の「魔女狩り」である「赤狩り」が起っていた。それは共産主義による「洗脳」とい

う新たな魔術で人間が操られる恐怖に怯えるパラノイアの時代だった。隣人の間に溶け込んだ共産主義の脅威が、ドン・シーゲル監督の『ボディ・スナッチャー／恐怖の街』（1956年）のエイリアンに取り込まれてしまった人間のように、SF映画の形で表象されていたのである。ちなみに、赤狩りの集団ヒステリーを過去のセイラムの魔女狩りに舞台を移して描いたのが、アーサー・ミラーの『るつぼ』（1953年）である。また、1968年ベトナム戦争においてアメリカ軍がソンミ村で非武装の村人たちを虐殺したことが『ザ・ニュー Yorker』で暴かれ、アメリカの正義が揺らいでゆく。70年代にホラー映画が大流行する肥沃な土壌が準備されていたのである。

アポロ11号による月面着陸成功は1969年のことだが、時代を逆行するかののように、前年の『ローズマリーの赤ちゃん』では魔女の陰謀が描かれていた。ローズマリーは陰謀を探偵のように解明しようとする。ハッチが残した『彼等はみんな魔法使い』にあるスティーヴン・マルカトー（Steven Marcato）の名の文字を並び変えると、ローマン・キャストベット（Roman Castevet）という名前が浮かび上がった。この辺りは『死の接吻』でデビューしたアイラ・レヴィンらしく推理小説的だが、ローズマリーは女性探偵のように謎に挑むのである（彼女はホームズのような観察眼でローマンの耳たぶに穴があることを発見している）<sup>6)</sup>。ポランスキーの『チャイナタウン』（1974年）も、ロサンゼルスの水の権利に絡む陰謀を私立探偵ジェイク・ギテスが追及しゆく物語であった。ポランスキーが1971年に映画化したウィリアム・シェイクスピアの『マクベス』（1606年）でもまた、ダンカン王がマクベスに「暗殺」された背後に、魔女たち

の陰謀が潜んでいたことも思いだしておこう。

#### 4. ポランスキーにおけるホロコーストと迫害のテーマ

隣人たちが自分を迫害しにやってくるという侵入恐怖は、『反撥』『ローズマリーの赤ちゃん』を経過し、『テナント／恐怖を借りた男』で執拗に描かれる。ポランスキー自身が演じるポーランド系の男トレルコフスキーは、パリの古いアパートにおいて、フランス系で前の部屋の住人シモーヌが窓から飛び降り自殺を凶った部屋を借りた<sup>7)</sup>。アパートの隣人は彼に対して敵意を抱いているかのようだ。入院していたシモーヌは亡くなり、周囲から騒音を立てていると告げ口をされるなど、トレルコフスキーは自分が攻撃されていると感じ、狂気に陥り始める。彼は壁にシモーヌの1本の前歯が穴に隠されていたこと発見する。やがてトレルコフスキーは部屋に残されていたシモーヌのドレスと化粧道具を使って、女装し、シモーヌと同一化してゆくのである。そして、彼はその衣装でシモーヌと同じように、窓から飛び降りてしまい、最後にはシモーヌと同じ包帯姿でベッドに横わたり、トレルコフスキーが見舞いにくる。冒頭の螺旋階段のように、映画がぐるぐるとループし、最初に戻るのである。一見カフカのサイコホラーのようだが、それだけでは終わらない。

隣人から迫害を受けていると感じるトレルコフスキーは、女装してシモーヌに近づいた時に、ドアに戸棚などを置いて部屋を閉じ、鍵穴から外の様子を窺う。だが、ゾンビ映画のように、窓から手が差し込まれる。それはまさしく『反撥』のキャロルの状況に重なるのである。また、自動車に轢かれ地面に倒れたトレルコフスキーは、見物人たちに見つめ

られるが、運び込まれた薬局で恐怖から老婦人に乱暴し、鎮静剤を打たれる。これはローズマリーの状況を反復している。迫害されていると信じ込んでいる人間の狂気を描くこのアパート三部作では、同じ侵入恐怖が三度映画化されるが、シモーヌに続きトレルコフスキーが二度飛び降りたように、三回窓からの転落が繰り返される。本当に不可解な映画だ。だが、トレルコフスキーをポランスキー自身が演じているからには、深い意味が隠されているに違いない。周囲から迫害を受けていると怯えるトレルコフスキーは、町山智浩が言うように、ユダヤ人の表象である（町山『町山智浩のシネマトーク』134-164）。ポーランド人のポランスキーは第二次大戦中に母親を取容所で殺され、一人で密告に怯えながら逃亡し生活をしていた。原作者のローラン・トポールもユダヤ系フランス人である。

町山智浩によれば、隣人の着ているパジャマの縦縞模様は、ナチス政権下のユダヤ人の囚人服を連想させるという（町山『町山智浩のシネマトーク』147）。トレルコフスキーが部屋に閉じこもるのは、自分の身体がフランス人のシモーヌに変化させられる恐怖からでもある。ユダヤ人は様々な民族に同化して、ナチスの迫害を逃れてきたが、それはまた恐怖でもある。民族的アイデンティティを同化によって喪失してしまうのだから。シモーヌはトレルコフスキーと同じ何かが入り込んで、アイデンティティが失われる恐怖を体験したのかもしれない。そのアイデンティティを守るために、壁に人間の身体で一番堅固な歯を隠し保存したのである。被害者妄想のトレルコフスキーの狂気が描かれているようだが、周囲から狙われていると思っていたローズマリーの妄想がじつは現実であったように、

彼の妄想と恐怖はホロコーストという「歴史的事実」に根付いたものであった。

考えてみれば、放浪の民族ユダヤ人自身が、安住の土地をもたない「間借り人(テナント)」だったのである（町山『町山智浩のシネマトーク』163）。ポランスキーは『戦場のピアニスト』（2002年）までホロコーストそのものを描かなかつたが、随所にそのテーマを散りばめていると考えてよい。トレルコフスキーは建物の穴から外に出てきた女性が隣人たちに囲まれるのを幻視していた。『戦場のピアニスト』においても部屋に侵入してきたナチス兵に老人は高い建物の窓から転落させられるし、建物の穴から逃げ出すが死んでしまう少年をユダヤ人の主人公シュピルマンは目撃する。ナチスに追われ続けるシュピルマンは、最後に寒さのためにドイツの軍服を着たことからソ連軍に攻撃され、「俺はポーランド人だ」と叫ぶ。それは、飛び降りた後にトレルコフスキーをつかまえようと迫ってくる隣人たちに、彼が「俺はトレルコフスキーだ。シモーヌじゃない」と叫ぶ姿にも似ている。

転落しもがくトレルコフスキーは隣人たちに見つめられる。この構図は、『反撥』の結末でキャロルが同じアパートの人間たちに見つめられるシーン、また横たわるローズマリーが隣人に見つめられるシーンを反復した。隣人は傍観するだけで救ってくれない。『マクベス』の結末でもマクベスの首が切り取られ、その首の視点で映像が作製されるが、切断されたマクベスの首が城の人間たちに眺められている。これはホロコーストを垣間見たポランスキーのニヒリズムなのか。この『マクベス』には、カルト集団のマンソン・ファミリーに妻シャロン・テートが胎児と共に16か所も刺され惨殺された後の作品であることが反映

されている。「女から生まれた者にはマクベスは倒せない」と魔女は予言したが、マクベスを倒すマクダフが帝王切開で生まれた時、胎児が取り出される血生臭いシーンが自虐的に映像化されているのである。またダンカン王に執拗に剣を突き刺し、眠りを殺したマクベスが医学ではこの苦しみを取り除けぬと語る姿に、ポランスキーの苦悩が投影されたと考えてもよい。

ポランスキーの妊娠八カ月の妻シャロン・<sup>ヘルタースケルター</sup>テートは、黒人との「最終戦争」を訴えるマンソン・ファミリーに殺害された。妊娠していた母親を収容所で殺害されたホロコースト被害者のポランスキーが、人種差別主義者によって再度ホロコーストを体験したようなものだ。この事件を映画化したのが『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』だった。アメリカでも黒人奴隷制と先住民虐殺という二つのホロコーストが存在したと、タランティーノはよくインタビューで答えている。『ジャンゴ 繋がれざる者』（2012年）で黒人ガンマンによって南部の農場を燃えあがらせ、『イングリシアス・バスターズ』（2009年）でユダヤ系の特殊部隊によってヒトラーのいる映画館を炎上させたタランティーノは、炎を用いて二つのホロコーストの歴史を改変していた。そして、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』でリック・ダルトンに映画の撮影で使われた火炎放射器で逆に焼き殺されるのは、人種差別主義者のマンソン・ファミリーの方である。

タランティーノの映画はしばしば時代考証の点で不正確である。たとえば、『ジャンゴ 繋がれざる者』にデリンジャーという小拳銃が出てくるが歴史上はまだ発明されておらず、時代錯誤だとされる。だが、映画自体が「1858

年、南北戦争の二年前」と間違えて始まっている。また頭巾を被って前が見えないと叫ぶ一団は「見えない帝国」と呼ばれたKKKを揶揄しているが（『ワルキューレの騎行』が流れる『国民の創生』のパロディである）、KKKはこの時代にはまだ存在していない。「歴史的事実」に基づく再現映画は、描写や記述の「正確さ」を売りとし日時や場所名を映画に差し込むが、タランティーノは逆に「本物」らしい「虚偽」を埋め込むのだ。現実を攪乱するタランティーノは『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』でハリウッドの悪夢の歴史をハッピーエンドに書き換えた。それはホロコーストという「歴史的事実」を体験し、それをホラーの形で表象したポランスキーへの敬意であると共に、歴史の「語／騙り」に挑む彼の戦いであった。

## 註

- 1) ラリー・コーエン監督の『悪魔の赤ちゃん』（1974年）の原題はIt's Aliveである。
- 2) このウサギはデヴィッド・リンチに影響を与え、『イレイザーヘッド』（1977年）の奇形の赤ん坊を「誕生」させた。
- 3) 町山智浩によれば、ダーレン・アロフスキーの『マザー！』（2017年）で閉鎖的状況に陥る人妻が部屋を黄色く塗るのも、「黄色い壁紙」の影響だという（町山『映画その他ムダ話』）。
- 4) こうしたブルームフォードの高層アパートとは違い、日本においてかつてどれも平均的なつくりの公団は、民主主義的な平等の象徴だった。だが、西村昭五郎監督のロマンポルノ『団地妻』（1972年）では、退屈した人妻が「私だってずっと我慢してたのよ。毎日毎日こんなコンクリートの箱の中で同じようなことの繰り返し。好きなものも食わず、欲しいものも買えない窮屈な収入。息が詰まりそうだわ」と嘆き、人生を「転落」してゆく（大山）。

- 5) 父親の眼を引き継いだ赤ちゃんは「眼は山吹色、全体が山吹色で、白眼も虹彩もない。ただ山吹色一色で、縦に黒く細く瞳孔が割れている」(248)。ローズマリーを演じたミア・ファローはウッディ・アレンと結婚するが、二人の息子であるはずのローナンは、前夫フランク・シナトラとの間にできた子供で、シナトラの青い眼を受け継いでいた。
- 6) アイラ・レヴィンは『硝子の塔』(1991年)においても監視と陰謀の問題を取りあげている。『硝子の塔』は「見たいですかそれとも見られたいですか」をキャッチコピーに、シャロン・ストーン主演で1993年に映画化もされたが、マディソン・アベニューにある高級高層マンションに、女性編集者ケイ・ノリスが引っ越してくる。不審死が多発し陰謀が隠された建物の謎をケイが探偵のように探るという点では、ローズマリーの状況とも似ている。ケイはマンションのオーナーのピート・ヘンダーソンと恋に落ちるが、ローズマリーと同様に秘密を発見するのである。ピートは隠しカメラによって各部屋のプライバシーを覗き見していた。「神の眼を通して、他人の生活の見てはならない部分をかいま見ること」が性癖になっていたのである(209)。ペローヤグリム童話の『青髭』さながらケイは隠しカメラのモニター画面の並ぶ「禁断の部屋」を発見する。ピートは住民たちの生活を楽しみながら覗き見し、さらにその秘密を知った人間を殺害していたのである。ケイを殺そうとするが、ピートは眼を負傷し、逮捕される。「両眼は赤ぐろい穴だった——ギリシャ悲劇の『オイディプス』の終幕、盲目の王が登場するときのように」と書かれているごとく(302)、「神の眼」を通して人々を監視していたピートは、罰として眼を失うという「去勢」の罰を受けるのである。
- 7) このシモーヌの全身が包帯で巻かれ片眼だけ見える姿は、町全体の人間がゾンビだったという結末のゲイリー・A・シャーマン監督の『ゾンゲリア』(1981年)において、全身包帯の人間の目に注射器を突き刺す場面に影響を与えた(町山『町山智浩のシネマトーク』141)。

## 引用文献

- 大山顕、佐藤大、速水健朗編『団地団——ベランダから見渡す映画論』キネマ旬報社、2012年。
- 西山智則『ゾンビの帝国——アナトミー・オブ・ザ・デッド』小鳥遊書房、2019年。
- 町山智浩『町山智浩のシネマトーク——怖い映画』スモール出版、2020年。
- 『映画その他ムダ話』<https://tomomachi.stores.jp>
- レヴィン、アイラ『ローズマリーの赤ちゃん』高橋泰国訳、早川書房、1967年。
- 『ステップフォードの妻たち』原著1972年、平尾圭吾訳、早川書房、1974年。
- 『硝子の塔』原著1991年、中田耕治訳、扶桑社ミステリー、1994年。
- Lowentsein, Adam. “Jordan Peele and Ira Levin Go to the Movies: The Black/Jewish Genealogies of Modern Horror’s Minority Vocabulary.” *Jordan Peele’s Get Out: Political Horror*, edited by Dawn Keetley, Ohio States P, pp. 101-113.
- Newton, Michael. *Rosemary’s Baby*, BFI, 2020.
- Wexman, Virginia Wright. *Roman Polanski*. Twayne, 1985.